

三重大学海女研究会報告資料

2013. 4. 22. PM. 3. 30

報告者 川口 祐二

0599-66-0909

伊豆の海で潜く海女たち

1. 伊豆下田の^{とうじ}田牛で (2013. 1. 19—20)

シゲ子さん

1930年(S. 5)志摩郡長岡村相差に生まれる。

国民学校高等科卒業後すぐに海女になる。生家は海産物商。18歳のとき、度会郡島津村古和浦へ出稼ぎ、テングサとりをする。

「古和浦の海は深く、七尋、八尋ありました。深かったから上から見ても、白装束の海女が見えなかったです」

そのあと、九州対馬の比田勝の近くの^{とうしゅうし}唐舟志でサザエとり。田牛へ来て地元の漁家に見込まれて結婚。

「子ども背負って浜へ行って、エビ網の仕事を手伝ってね。娘はもう60すら(60歳です)」

かよ子さん

1935年(S. 10)南伊豆町中木に生まれる。

1955年までは伊豆長岡で住み込みで家事手伝いの仕事。その年の11月に結婚。田牛へ来てから海女になる。初めは、家から歩いて磯へ行って漁をする「陸採り」をしていた。

田牛は現役の海女は5人、うち3人が海女小屋を使っている。冬は休み。2012年の夏は豊漁で、いい日は1日サザエを100キロとった。

「ウエットスーツのない頃は、1日3回入っていたですよ。テングサは10月いっぱい採れた。だけど背負わなければならないし、止めました。テングサ採りがさかんな頃は、磯掃除というのがあってね。海女全員が出て鎌でカジメやホンダワラなんかを刈り取って、テングサがよく生えるようにしたもんですよ。その日は組合の方から日当が出ました」

2. 熱海の海で (2013. 2. 15)

静子さん

1929年 (S4) 志摩郡長岡村国崎に生まれる。

「働きに来たのは16歳でした。ここよりちょっと北の米神という所へ来たですよ。根府川の駅で降りてね。テングサをとりました。とまいさんも国崎の人でした」

「アワビよりテングサの方が稼ぎになった時代がずっと続いたですよ。今はテングサは誰もとらない」

「あしたは姪っ子がいっしょに行きます。やる気があって海女になると言うからね。そんなんだったら、私が生きているうちに少しでも教えてあげるから、いっしょに行こうって言ってね。だから、今はこの海は海女2人なの」

「親がいなくなると、生れた在所も遠いですよ。国崎では、姉ちゃんわしげ (私の家) へは来やへん、来やへんと言うとらしい」

伊豆の海で潜く海女たち



1



2



3



4



5



6



7



8





11



12



13



14



15



16



17



18



19



20